

平成 6 年度 瀬戸内海東部域における 回遊性魚類（サワラ）の資源生態調査（抄録）

岡崎 孝博・渡辺 健一

目 的

本州四国連絡架橋の漁業影響調査の基礎資料を得るために徳島県沿岸におけるサワラの漁業実態および資源生態を明らかにすることを目的として、播磨灘海域と紀伊水道海域に標本漁協を設定し、漁獲量調査・標本船調査・生物調査を行った。その調査結果の概略を記す。なお、詳細については本州四国連絡架橋漁業影響調査報告書第 65 号を参照されたい。

播磨灘海域では春期に流し網でサワラを漁獲し（春漁）、紀伊水道域は秋期を中心に立縄および釣りで漁獲する（秋漁）。

播磨灘海域の標本漁協である北灘漁協粟田支所における平成 6 年の漁獲量は約 7.6 トン（前年比 69%）で不漁であった 5 年をさらに下回った。過去 5 年間を見ると平成 3 年をピークに漁獲量の減少が続いている。標本船調査から小豆島周辺での操業は無く、操業海域は播磨灘徳島県沿岸域である北灘沖合いが中心であった。

紀伊水道海域の標本漁協である橘町漁協における平成 6 年の漁獲量は約 7.9 トン（前年比 378%）で、5 年に比べ著しく増大したが、過去 5 年間と比較して高い漁獲ではなく、平年並か、やや不漁と思われた。標本船調査から操業海域は紀伊水道中心部の狭い海域に限られていた。

平成 6 年の春漁では漁期初めから 5 年級群である満 1 歳魚（尾叉長 50～55cm）の漁獲物に占める割合が大きかったが、6 年春漁が不漁であったことから 5 年級群の来遊量が増大したというよりはむしろ大型魚（尾叉長 70cm 以上）の漁獲が減少したために、5 年級群の漁獲物に占める割合が大きくなったと思われる。また、秋漁では 12 月に入って大型魚が多く漁獲され、例年並みの漁獲量であった。春漁で漁獲の少なかった大型魚が秋漁で多く漁獲されたことから、春漁で大型魚の漁獲物に占める割合が小さかった原因の 1 つとして回遊径路や回遊時期が例年と異なったために大型魚群をうまく捕らえられなかったことが考えられる。

平成 6 年は水温が高めに推移し、高水温が成長に好影響を及ぼしたと考えられたが、回遊経路や仔稚魚の生残に対する影響については不明である。

生物測定調査より全長・体重関係、産卵期の推定、雌一個体あたりの抱卵数を求めた。